2024. 5. Vol. 44

RCC Newsletter

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学　キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

平和実現に寄与するスクールモットー

RCCセンター長　淺野　淳博

米国『タイム誌』（二〇二三年五月二二／二九日号）は現日本国首相をその表紙に据えて、「[首相は]何十年も続いた平和主義を破棄し、自国を真の軍事大国とすることを望んでいる」と解説しました。じつに政府は防衛費に関する五ヵ年計画によって二〇二七年には一一兆円、つまりGDPの二%越えを決定し、さらに防衛装備移転三原則の運用指針を閣議決定により改定しました。この明らかな「軍事大国」化の動きを憂いつつ見守る関西学院同窓らの手許に、二〇二四年三月、本学院同窓会が編集責任を負う『母校通信』（一五三号）が届きました。本号は「北朝鮮のミサイルが日本の上空を通過する！私たちは、日本は安全であるという神話にしがみついている状況ではないのかも知れない」（五頁、編集委員長）との編集意図を明記しつつ、「日本の防衛を考える」と題する同窓生と現大学長他の対談を巻頭企画として配置しました。

本企画では防衛省と自衛隊に務めた同窓生二名の働きが紹介されたのち、学長がこれをまとめる仕方で以下のようにコメントしています。「本学のスクールモットーは“Mastery for Service”ですが、アメリカの若者の会話で“Service”というと“Military Service”、つまり兵役・軍務につくことを意味します。長く平和を享受してきた本学の学生は、“Service”にこの含意があることは気づきません。関西学院で学ばれたお二人はどうお考えでしょうか」（五頁）。キリスト教と文化研究センター（以下RCC）のセンター長室会メンバーは、この学長の言説に大きな違和感を抱きました。

この文面からは、〈“Mastery for Service”が“Mastery for Military Service”を含意している、そして注意深い本学の学生はそのように受けとめるべきだ。防衛に携わった二人が防衛という観点からスクールモットーをいかに理解するかうかがいたい〉との意図があるという印象が避けられません。多くの読者がそのような印象を実際に抱き、問い合わせが学院とその関係者のもとに届いています。ふりかえれば本学院の歴史においては、スクールモットーがあきらかな仕方で軍国的に意味づけされたケースがありました。帝国政府の圧力の下で、本学院はこのスクールモットーを「滅私奉公」と説明して報告したからです。本学院関係者は学院がこのような仕方でかの戦争に加担した事態を記憶に留めて、同じ過ちが繰り返されないよう細心の注意を払うべきところです。そのような中で、「アメリカの若者の会話」においてServiceが一義的にMilitary Serviceを意味するかのような誤った印象を与えつつ、スクールモットーと従軍とを並列させた発言は思慮に欠けるとの批判を避けえません。

関西学院大学はそのミッション・ステートメントとして、「スクールモットー“Mastery for Service”を体現する、創造的かつ有能な世界市民を育むことを使命とします」と述べます。提唱者のベーツ氏がこのモットーを「人類への奉仕」と説明していることに鑑みるなら、本学の教育と研究の大義は、全世界とつながり広く全人類に奉仕するという意味での「世界市民」の育成であろうと思われます。しかし今回の巻頭企画が示唆するスクールモットーの適用は、「世界市民」を同盟国市民へと限定するものであり、それはスクールモットーを心に刻み世界平和を切に求める同窓生を含む本学院関係者の思いと異なるものだと思われます。RCCのセンター長室会メンバーは、『母校通信』における巻頭企画に携わった方々が、同盟国の安全保障でなく、普遍的で恒久的な平和実現に向けていかに本学院とその同窓生らが寄与しうるか、そのヴィジョンを明示する機会を設けて頂きたいと考えます。

最後になりますが、RCCはキリスト教主義教育研究室から建学の精神に関する研究を引き継いだ機関として、今回の事態を受けて学内関係者ならび同窓生のあいだで、建学の精神、スクールモットーに関する学びが行われ、建設的な対話が継続されて、理解が深まることを期待します。またそのために『建学の精神考』の発行などをとおして、引き続きその研究成果を発信してゆきたいと考えます。

“Mastery for Service”── 愛による平和の実現に向けて

RCC センター副長　梶原　直美

“Mastery for Service” は、一九一二年に関西学院高等学部長に就任したC.J.L. ベーツ先生が“Our College Motto”として提唱したもので、このことばは、一九二〇年の第四代院長就任に伴い、関西学院全体のスクールモットーとなりました。

ベーツ先生は、このスクールモットーについて以下のように述べています。「私たちがマスターになろうとする目的は、自分個人を富ますことでなく、社会に奉仕することにあります。…この世界が、自分が生きてきたことによって、より良くなることを目的として、人類のために何か有益な奉仕をすることを願うのです。」(C.J.L.Bates, “OUR COLLEGE MOTTO, Mastery for Service”『商光』第一号、一九一五年、三～五頁／(冊子)「輝く自由」、八頁。)

では、社会奉仕、有益な奉仕とはどのようなことを指すのでしょうか。ベーツ先生は、このスクールモットーを提唱した三年後、当時認知され始めたニーチェのキリスト教批判について対話的に考察しており、そのなかで、マタイによる福音書二五章四〇節やマルコによる福音書一〇章四二～四四節に触れながら、ニーチェの超人思想に代えて、権力ではなく人に仕えることをキリスト教の理想として論じています。「道徳と精神との再生の其法章は剣に非ずして愛、其英雄は武人にあらずして僕―是が基督教の理想である。」(C.J.L. ベーツ「ニイチエ乎基督乎」『神學評論』第二巻、第二号、一九一五年、七一頁。)ここには、関西学院の土台であるキリスト教そのものの使命として、剣でなく愛の実践を目ざす僕(しもべ)の姿が明示されています。

しかし人間は、その教えとは逆に、自分を主人として中心に据え、その価値観や利益のために、様々な力をもって他者を支配しようとすることがないでしょうか。

ベーツ先生は、少年時代に同時に通っていた異なる三つの教会での体験について述べるなかで、「それぞれが、自分たちの文化と言葉と教会が一番だと思っていました。しかし、寛容と良い意志と互いを敬う心が問題を友好的に解決してくれました。」(R.M. グルーベル監修『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』、関西学院大学出版会、二〇一九年、二四頁)と振り返っています。ここには、寛容、良い意志、敬う心こそが、異なる他者と生きることを可能にするという考えが示されています。

また、人間が獲得した科学的な知の大きさに対して、他者とともに生きることへの学びの貧しさも指摘されており、「人類が良い意志を実行することを通してのみ、永遠の平和が実現するのです。」(同上、二三頁)と述べられています。

同じくベーツ先生の言葉をたどると、一九二五年、中学生以上の生徒と学生に軍事教練が課されることになったさい、「…各国民が軍事的準備を行うことを中止することを要求し、更に全世界のキリスト教的教育者とは協力して、国民と政府に対して、剣に依存して世界のいろいろな問題を解決するよりも、更に善い方法を取るように努めることを希望する。」(同上、一七三～四頁)との考えが示されています。

以上の内容に鑑みると、ベーツ先生が提唱された“Mastery for Service”は、分断や対立、剣による争いの絶えない世界のなかにあってこそ、剣を捨て、僕として、寛容さと他者への敬意をもちながらともに生きる道を、わたしたちに指し示していることがわかります。そして、暴力によることなく他者と対話し、いのちを尊重する平和な社会の構築のために自らの力を育て用いながら生きていく責任が、ここに示されていると言えるでしょう。

■研究プロジェクト報告

■研究プロジェクト
戦争の記憶と想起 ── 平和への警告とその継承

【公開研究会報告】

広島女学院のヒロシマとHIROSHIMA ── その平和学習の取り組みについて

講師　広島女学院大学人文学部准教授　前田　美和子 氏

二〇二三年二月二七日(火)に関西学院大学吉岡記念館にてRCC研究プロジェクトの一つである「戦争の記憶と想起」の第四回研究会を行いました。今回は、広島女学院大学

人文学部准教授の前田美和子氏を講師にお迎えし、「広島女学院のヒロシマとHIROSHIMAその平和学習の取り組みについて」を主題として開催し、一七名の参加がありました。

主題にある「ヒロシマ」という表記は、平和や原爆に関連する新聞記事や広島市が被爆都市として世界恒久平和の実現を目指す都市であることを示す場合に、「HIROSHIMA」は、国際平和文化都市を示す場合に使用されています。前田氏は、そのヒロシマはかつて日清戦争の際に軍都であり、太平洋戦争中には第二次総合指令部が配置されていた場所でもあったことに言及し、狭義のヒロシマに限定されない仕方で戦争の歴史と平和について多角的に捉えることを平和学習の一つの課題として示されました。

広島女学院の平和学習の土台には、一九四五年八月六日に被爆し、生徒と教職員に多くの犠牲者を出し、廃墟と化した校庭に呆然として涙さえでないでたたずんだ松本卓夫第四代院長をはじめとする先達たちの思い、そして、一九七三年に刊行された『夏雲』という広島女学院原爆被災誌があります。この被災誌は、一九三一年にはじまる「一五年戦争のあらまし」と「戦時下の国民生活」「戦時下の女学院」について説明した後、女学院の原爆被災状況について記した被災者である生徒、父母、教職員による多数の手記を収録しています。

一五年戦争と原爆被災者の記憶を土台として、狭義の「ヒロシマ」を越える多角的な視点から広島女学院の平和学習が展開されています。中学一年生から高校三年生までの間に、例えば、原爆に対するアメリカとアジアの視点、長崎の視点、真珠湾を題材とした日本の加害の視点、沖縄の地上戦と現在に至る基地問題の視点といった様々な角度からの学びが計画され、最終的に各生徒自身が平和な社会の創出のために何ができるのかを探求します。

また、東京大学と広島女学院中学高等学校、広島女学院同窓会等が協力して、被爆の体験談、写真、地図等を多元的にデジタル上で記録するヒロシマ・アーカイブという新しい取り組みも紹介されました(https://hiroshima.mapping.jp/index_jp.html)。これは被爆から七〇年目の二〇一五年に公開されています。被爆者のいない未来に向けた戦争と戦災の記憶を継承するための新しい取り組みです。

被爆を体験したヒロシマにある広島女学院における戦争と戦災の記憶と想起について、また、それらを土台とした平和学習の取り組みについて学び、その実践や継承の課題について考える時間となりました。

(報告者 主任研究員 小田部 進一)

新刊紹介　『エコロジカル聖書解釈の手引き』

(キリスト新聞社、2024年3月18日)

アッシジのフランチェスコが鳥に語りかけている藤城清治の絵が目の前にある。フランチェスコは聖書のどの箇所を鳥とわかちあっているのだろうか、聖書の言葉をどのように解き明かしているのだろうか。ヨブ記には、神は空の鳥・野の獣によって人に知恵を授けるとある。だから、もしかしたら鳥の方がフランチェスコに、聖書の言葉を解き明かしているのかもしれない。このような想像力をはたらかせながら聖書を読んでいく試みがエコロジカル聖書解釈である。

本書は、RCCプロジェクト研究「エコロジカル聖書解釈」(二〇一九―二〇二三年度)の成果の一部である。本書は研究論文の集成ではない。読者として説教者・教会学校リーダー・中高の宗教科教員を想定して、書き下ろされたものである。多くの方に読んでいただけると幸いである。

(報告者 法学部教授 大宮 有博)